

「精神医学の社会的基盤」第1回研究会報告

今年度から始まった科研費による「精神医学の社会的基盤」研究会の第1回が、2016年7月5日（火）、東京大学駒場キャンパスにおいて開催された。初回である今回は「オープンダイアログの思想的基盤（1）」として、野村直樹氏（名古屋市立大学）が「なぜベイトソンのダブルバインド理論はオープンダイアログにとって大切か」と題する講演を行なった。

野村氏の講演は、ベイトソン『精神の生態学』所収の論文「精神分裂症の理論化に向けて」をテキストにセミナー形式で実施され、前半はダブルバインド理論の概観であった。ベイトソンは、文化を静的な図式として描写することを使命とした従来の文化人類学には関心を持たない。むしろ彼はサイバネティクスにおいて誕生した「関係性の言語」を用いて、動的な人間の精神病理を語ろうと試みる。関係性の言語は、デカルトが完成させた古代ギリシア起源の「個の言語」と対比され、異なる論理階型間の不連続性が破られるようなコミュニケーションについての考察を可能にしてくれる。患者と治療者との間で生ずるダブルバインドもその一例であり、ここからオープンダイアログへ直結する道筋が開かれると言ってよい。

講演の後半では、特定質問者の山田理絵氏（東京大学大学院）による問題提起の後、それに答えながら野村氏はベイトソンの論文の内容により深く踏み込み、オープンダイアログに対してダブルバインド理論が持つ意義を解説した。最も重要な洞察は、本論文を「母親原因説」として読むと、本論文の重要性は完全に見過ごされてしまうという点である。確かに現代の私たちには、子が分裂病（統合失調症）になったのは母親が悪いからである、と書いてあるように読めてしまうことは否定できない。こうした事情が、一部の療法家からベイトソンが疎まれる一因ともなっている。しかし野村氏によれば、本論文が発表された1956年当時、これを母親原因説として解釈した読者はいなかったという。そこに主眼は置かれておらず、母子関係の双方向性を日常生活の中へ落とし込んだ点こそが評価されるべきである。このような知的遺産を私たちは継承し、ダブルバインドを解消しようとするのではなく、治療に活用しようとするオープンダイアログへつなげていくことができる。

最後の質疑応答では、多方面に話題が広がった。ダブルバインド理論およびオープンダイアログと結びつくと思われるものとして、当事者研究、マインドフルネス、臨済宗の公案などが指摘され、参加者の関心を刺激した。

（報告：大内良介／東京大学大学院総合文化研究科修士課程）